〔東京家政大学研究紀要　第37集 (1), P. 29〜34, 1997〕

# *Lois the Witch*
# —追いつめられた女の悲劇

片岡　洋子

(平成8年9月30日受理)

# *Lois the Witch*
# —A Tragedy of the Woman Who Was Brought to Bay

Yoko KATAOKA

(Received September 30, 1996)

## [I]

*Lois the Witch* は *The Life of Charlotte Brontë* (1857) と *Sylvia's Lovers* (1863)との間に書かれた短編小説であり，ディケンズによって新しく発刊された *All the Year Round* に1859年10月に掲載された．この時期はリアリスティックであり，また幻想的でもある短編小説が豊かに書かれた時代であり，ギャスケルが小説技術を実践し，その可能性を拡大していった跡を見ることができる．この作品もその一つとして「短編小説の力作」[1]，「ギャスケルの傑作の一つ」[2]等，高い評価を得ている．この時期にギャスケルは権力，権威，信仰，性といった問題に取り組みながら，人間性の内奥をまざまざと照射している．この作品においても1692年のニューイングランド，マサチューセッツ州セイラムにおける「魔女裁判」—20人の犠牲者が絞首台に送られた—を舞台に，社会の狂信的妄想の犠牲となって死んでいく一人の若い女性の悲劇的生を中心にして，人間の内面の問題を的確に描出することに成功している．作者はCharles Upham の *Lectures on Witchcraft* : Comprising of a History of the Delusion in Salem in 1692 (Boston, 1831) 中の歴史的記録に多くを拠っているが，当時の社会的歴史的背景をしっかりと把握した上で事件を再構築しており，物語自体はフィクションである．

夫がユニテリアンの牧師であったギャスケルは，大方のユニテリアン同様他のあらゆる信条に対して実質的には友好的であった．しかしその例外がローマン・カソリシズムとカルヴィニズムであり，とりわけカルヴィニズムの一宗派であるピューリタニズムを最も嫌った．その理由はそれがあまりにも抽象的，神学的であり，「神秘的教義」の研究に熱中しすぎること，また過酷な迄に正確さを要求する厳しさの故であった．[3] 一方長老派の一派として始まったユニテリアニズムが，ピューリタンと歴史的な関係をもっていたことに留意すべきだろう．但しギャスケルの時代迄には，ユニテリアニズムはカルヴィニズムとは非常に異なる宗教を発展させていたのだが．従ってギャスケルがピューリタンに興味を抱き，「魔女裁判」に魅せられていたとしても不思議ではない．

ギャスケルは *The Heart of John Middleton* (1850) では英国ランカシャー，*The Poor Clare* (1856) ではベルギーを舞台に魔女を登場させている．また最初の三つの物語からなる物語集 *Life in Manchester* のペンネームがCotton Mather Millsであったのは実に興味深い．cotton, mills はギャスケルが結婚後暮したマンチェスターの主要産業と深い関係があり，そのペンネームは冗談とみなすことができよう．一方 *Lois the Witch* にも登場する Cotton Mather は17世紀後半から18世紀にかけて生きたアメリカのピューリタンの牧師であり，*Memorable Providences Relating to Witchcraft and Possessions* (1865) の作者である．彼はセイラムの「魔女裁判」で少なからぬ役割を果したことで有名であり，ギャスケルがその名前を借用した可能性は高い．その裁判は，1840年において反啓蒙主義と戦ったユニテリアンが大いに興味を抱いた問題であった．またユニテリアンの会誌に彼の有名な説教が載ることで，彼の名前

狭山：教養部　第3研究室

はよく知られていた.[4] 1856年6月にはアメリカ人の記者が「魔女裁判」についての情報をギャスケルに送ることを約束している.[5] 彼女の興味はこの時期にセイラムの住人であるナサニエル・ホーソーンの作品を読んだことによって復活したとも考えられる.[6] ホーソーンの祖先 John Hathorn は最も厳しい迫害者の一人として *Lois the Witch* に登場している.

このようにピューリタニズムに対するギャスケルのアンビバレントな態度は, *Lois the Witch* においても反映されていると思われる. その物語は表面上はピューリタンによって示された狂信的妄想に対する警告とみなすことができ, 一般的にはいつ, どこでも時代に合った形の衣装をまとって現われ, 誰もが事件の加害者となりうる「精神の鋳型」を描いていると言える. 作者はリアリズムの立場で魔女騒動をユニテリアンの理性の目で見る. しかしその一方魔女の存在を当然のことと決め込んでいるために現実の中へ超現実が侵入し, 技法的にはホーソーンの作品におけるロマンスの要素を利用しているとも思われる. これは人生が合理のみで割り切れるわけではなく, 非合理な情念によっても大きく支配されることを作者が示唆しているためとも思われる. この小論においては作者のこの二つの態度に留意しながらヒロイン, ロイスの受難に満ちた生を検証し, 彼女の悲劇的生に託されたものを考えてみたい.

[II]

作者はまずヒロイン, ロイス・パークレーが郷里である英国ウォリックシャーを離れ, ニューイングランドでの暮しを余儀なくされる事情を読者に伝えている. 1690年孤児となった教区牧師の娘ロイスは病床にあった母親の臨終の言葉に従い, ニューイングランドに住む唯一の親戚である母方の伯父の家で暮すために牧師館を去り, また求婚者とも別れて大西洋を渡る. ボストンに上陸したのは1691年5月であった. その地は希望にあふれた輝かしい「新世界」どころか海と同様に危険に満ち, 不安定な世界であることがわかる. 甘い香りを漂わせるジャスミンやバラが咲き乱れる穏やかで美しい郷里とは全く異質の世界であり, 森が開拓地を取り囲み, つんざく風がヒューヒュー吹き, 海から霧が流れ, ロイスの涙と混じり合う. 亡くなった父の同窓の友人であるホルダーネス船長がロイスを連れて行くスミス未亡人の宿屋の壁には, 獣皮, 亀甲, 貝殻, 海島の卵が掛けられ, それは客間というよりは「自然史博物館」にも似た部屋である. 作者はこの土地が文明から遠ざかった古代の世界であること, またその土地の薄気味悪さや凶暴性を強調しており, 若い女性の身に迫る危険性, 及びそれに翻弄される運命を予告するかのようである. 開拓地の周囲は様々な脅威に晒されている. 森の中のインディアンたちはうまく変装しているために, 木立そのものが動くように思われる. ローマ・カトリック教徒の海賊が海岸を荒らしている. 女のぞっとするような泣き叫ぶ声 ― 「神様！お慈悲を下さい. お助け下さい, おお神様！」 ― が沼地から聞こえてくる.

半ば懐疑的, 半ば信じながら様々な恐怖を感受するロイスは, 4才の時乳母の腕に抱かれながら, 池で水責めにあって溺死する魔女 ― 灰色の髪の毛が肩に流れ, 顔が血だらけで, 目が憤りでギラギラしている ― を目撃し, その魔女によって呪われた事の次第を船長に語る. 村の郊外で一人で暮すその老女は, いつも何かぶつぶつ独り言を言っていたのであり, 多くの村人たちが病気になり, 春にはたくさんの家畜が死んだ後処刑されたのである. ハナというその女は, 牧師であったロイスの父が彼女を救おうとしなかったためにロイスに復讐すると批難し, 水に溺れながらロイスに呪いを吐く.

> "Parson's wench, parson's wench, yonder, in thy nurse's arms, thy dad hath never tried for to save me ; and none shall save thee, when thou art brought up for a witch." (p. 122)

ハナはその水責めを見に集まった群集をぐるりと見回し, ロイスに目星をつけ, 彼女を凝視する. お互いの目が見つめ合ったことをロイスは思い出す. 鏡としての相手の目の中に自己の姿を見るこの場面は実に象徴的であり, ロイスのその後の運命への伏線となっている. ハナの言葉は何年にもわたって, 夜眠っているロイスの耳に鳴り響くのであり, 彼女自信が魔女とされて憎しみの対象となり, ハナが溺死したその池の中に漬かっている夢さえ見ることになる.

ロイスは自身と魔女ハナとの間の絆に気づく. この「因果の鎖」が魔女の呪いに表現されており, *The Poor Clare* のルーシーが祖母ブリジェットによって呪いをうけたように, 無実の者にはね返ることを作者は示して

いる．ホルダーネス船長は，ロイスが英国で魔法をかけた（bewitched）多くの若者がきっといたであろう，と冗談を言う．彼女の美貌は呪いでもあるのだ．

セイラムへ到着するためには森の中を通らねばならず，その道には多くの恐ろしい，不可思議な獣や更に恐ろしいインディアンが出没する．奇妙な鳥がインディアンのときの声にも似た鳴き声を響かせ，いけにえにされた人の噂もある．また森は白人の乙女をインディアンの男たちのテントへおびき寄せる，狡猾な「二つの頭をもつ蛇のねぐら」でもある．二重の防御策を周囲にめぐらした町は森によって包囲され，危険で恐ろしい陸の孤島のようである．作者は風景の中に潜む不安と恐怖を次第に募らせていくのであり，セイラムへの旅が「恐ろしい精神風景への旅」，「正気から遠去かる旅」であることを示唆しているようだ．それはまずロイスが一緒に暮すことになるヒクスン一家に具現される．

孤児として未知の土地へやって来たロイスは宗教の異なる人々の中で生きなければならず，彼女の不安と孤独には測り知れないものがある．しかも頼りにすべきヒクスン家の人々は冷ややかでよそよそしく，彼らの悪意と敵意，気まぐれの中で心優しい純真なロイスは自身の場を見い出そうと努める．家族の中でただ一人，人間的で優しかった伯父が病気で亡くなると，悲しみと一層の孤独のうちに厳しい生活を余儀なくされる．

> Lois was about as unhappy as any of them; for she had felt strongly drawn towards her uncle as her kindest friend, and the sense of his loss renewed the old sorrow she had experienced at her own parent's death. But she had no time and no place to cry in. On her devolved many of the cares which it would have seemed indecorous in the nearer relatives to interest themselves in enough to take an active part : the change required in their dress,the house-hold preparations for the sad feast of the funeral—Lois had to arrange all under her aunt's stern direction.(p. 141)

外の風景がそのまま投影されたかのように，ヒクスン家の人々は神経症を患い，情緒障害に陥っていることが明らかになる．それにはピューリタニズムの厳格で禁欲的な宗教性が歪んだ形で絡んでいることが考えられよう．母グレイスと３人の子供たちについては，それぞれの特徴ある個性が的確に描出されており，その家族が一種の神経症集団であることが提示される．

グレイスは息子に抱く愛を除いて，厳しく，冷酷，無関心である．息子に対して彼女は近親相姦を思わせる程強い所有欲をもっている．宗教について彼女は独善的であり，ロイスが両親のもっていた宗教や国に対する忠誠心を守ろうとすると，それを厳しく退ける．また牧師であるメイザーに，信心について彼を教えることができるとさえ豪語する．姉妹のフェイスとプルーデンスはそれぞれ現われ方は異なるが，自然な感情表現が見られず，笑いと美に欠け，自己中心的であり，母親に似て無節操である．とりわけ一人よがりな支配力を他者に行使することを好む傾向がある．プルーデンスは落ち着きのない，早熟な娘である．

> This strange child seemed to be tossed about by varying moods : to-day she was caressing and communicative ; to-morrow she might be deceitful, mocking, and so indifferent to the pain or sorrows of others that you could call her almost inhuman. (p.137)

妹が躁病的である一方，姉フェイスはノラン牧師に片思いを抱いて陰気にふさぎ込み，それが体の症状にまで現われている．

> Faith grew sadder and duller, as the autumn drew on. She lost her appetite ; her brown complexion became sallow and colourless ; her dark eyes looked hollow and wild. (p.139)

ピューリタンたちは結婚を非常に重大なことと考えていたため，若すぎる結婚には賛成でなかった．従って当時のセイラムではまだ結婚も婚約もしていない10代の娘が沢山おり，彼女たちには抑圧された生命力，あらゆる方向への欲求と衝動がみなぎっていた．しかし村の生活にはそれらのはけ口は何もなかったのだ．[7] その抑圧された生命力が娘たちの情緒や振舞いに病的な症状として現われており，ヒクスン一家の神経症はピューリタニズ

ムの支配する閉塞的なニューイングランド社会の病的症状と一体となっているのである．

長男マナセは神学書に没頭し，自己の内なる世界に生きて夢や幻視を見る．それは宗教によって邪道に陥った若者の姿であることを作者は指摘している．母グレイスでさえ，彼が鬱病と妄想の発作を起こすことを認める．かつて自殺を試みたこともあり，また近親相姦的に妹フェイスに執着したようにも思われる．ロイスがヒクスン家で暮すうちに，マナセは彼女への欲望を次第に募らせていく．ロイスがやって来る数ヵ月前に，古い神学書を読んでいた時の様子を彼は次のように語る．

"…I saw no letter of printer's ink marked on the page, but I saw a gold and ruddy type of some unknown language, the meaning whereof was whispered into my soul ; it was, 'Marry Lois! marry Lois!' And, when my father died, I knew it was the beginning of the end. It is the Lord's will, Lois, and thou canst not escape from it." (p. 145)

マナセの欲望は信仰―特にカルビニズムの教義の一部である「予定された運命」―と結びつき，「ロイスと結婚せよ」とささやく神学書は予言の書となる．それを主張する彼の妄想的言葉に，ロイスは驚きと不安を抱かずにはいられない．未来の妻としてロイスを選んだこと，それが神によって定められた選択であることをマナセが語る時，ロイスは彼の肉体の外観―暗い目，長くつやのない髪の毛，灰色でザラザラした皮膚―を不快に思う．そして悩みながらも，予言的主張の危険性を認識するロイスは，結婚への強制をきっぱりと拒絶する．

"I may take a dream to be the truth, and hear my own fancies, if I think about them too long. But I cannot marry any one from obedience." (p. 146)

マナセと同じ家で暮すロイスにとって重圧は一層強まり，しかも味方はありそうもない．というのは，家族の中の唯一人の男性であるという理由だけで，彼は周囲の人々からヒーローとして重んじられていたからである．ヒクスン家の人々にとってマナセの狂乱の幻視は，彼が神によって選ばれた者であることの証拠である．ロイスを保護するどころか，グレイスは情緒的に増々混乱していく息子に対する支配を保持する手段として，彼女を利用しようとさえする．ロイスはマナセとの対峙において，「追いつめられた」者として表現される．

［Ⅲ］

冬になり，セイラムの町が雪で白く覆われると，夜は暗く，長く，単調である．収穫の時の賑やかさや，食事で祝いの乾杯をした後の厳粛な感謝の祈りも終っていた．クリスマスや懺悔火曜日のような異教的なお祭り騒ぎは厳しく禁止されていた．そのような状況において少女たちが台所で召し使いの話に耳を傾けるのは，数少ない楽しみの一つである．ヒクスン家ではインディアンの老いた召し使いナティーが台所の炉に身を屈めながら，魔法使いの話など不思議な，薄気味悪い話を娘たちに話して聞かせる．その娘たちは，かつてはナティーの祖先たちのものであった狩猟地から彼女の部族を追い立てた抑圧者たちの子孫である．聴き手たちへ及ぼす力を，ナティーは無意識のうちに楽しむかのようである．史実においても家庭の台所が少女たちの集会所となり，召し使いの不気味な恐怖物語に聞き入ったことが知られている．その興奮や緊張が思春期の少女たちの不安定な感情と結びつき，集団ヒステリーの下地を生み出したと言われている．[8]

一方1691～92年の冬は，災難が続いて起る不運な年であり，人々の生活は特別気をめいらせるものであった．天然痘の流行．恐ろしいインディアンの襲撃．更にニューイングランドが特許状の下に享受してきた独立に近い状態を永久に失ったことがますます確実になってきていた．信心深い人たちはこれを神の心変わりととらえ，自分たちの心情の中に―そして隣人たちの行為の中に―神のこの心変わりの原因があると信じ，それを探し求めつつあったのである．[9]

危険な迷信がはびこる四囲の状況の中でマナセの精神は一層混迷し，病的な様相を増していく．ロイスが彼と結婚するのは神が定めた選択であり，従わなければ死を招く，という確信が形成されるのは避けがたいものに思われる．クリスマスに彼はロイスに，森の中で見た幻視を次のように語る．

"…The visions come thick upon me, and my

sight grows clearer and clearer. Only this last night,…I saw in my soul,…the spirit come and offer thee two lots ; and the colour of the one was white, like a bride's, and the other was black and red, which is, being interpreted, a violent death. And, when thou didst choose the latter, the spirit said unto me, 'Come!' and I came, and did as I was bidden. I put it on thee with mine own hands, as it is pre-ordained, if thou wilt not hearken unto the voice and be my wife. And when the black and red dress fell to the ground, thou wert even as a corpse three days old.…" (pp.154-5)

この戦慄的な「死体愛」の幻視は大きな不幸の前兆となるのであり，春になって雪と氷が溶けると騒動が始まる．厳格なタパウ牧師の二人の娘がヒステリーに襲われ，痙攣を起し，彼らの召し使いであるインディアンのホタが魔女として告発され，裁かれる．

一方敬虔なヒクスン家では，もう一つの欲望が火花をちらしている．それは先に触れたように，教義に関する論争の後町を去ったノラン牧師に対するフェイスの口には出されない片思いの愛である．ホタが処刑された絞首台の陰で，ロイスはフェイスからあずかった手紙をノランに手渡す．彼女の無垢な美しさに心をうたれるノランについては，「地上の善への信仰がその瞬間彼の魂をおそった．そして彼は知らずに彼女を祝福した。」と作者は述べる．無意識のうちにノランに魔法をかけ (bewitch)，魅惑するのはロイスである．この場面は，無垢ではあっても女性には男性を魅きつけ，そして恐れされる原始的かつ危険な要素があることを示唆しており，それは又魔女の性質にも通じる要素である．ノランの祝福，彼がロイスの肩に触れたことは，それを暗闇の中で凝視するフェイスにとっては無意識な欲望の表現に思えるのであり，フェイスはロイスに嫉妬心を募らせていく．

ホタの絞首刑の後に招集された集会で，発作に襲われ，金切り声をあげるプルーデンスによってロイスは第二の魔女として告発される．参列者すべての目が憎悪と恐怖を抱いて彼女をじっと見つめる．群集が彼女の回りで騒ぎ出し，女たちは奇声を発し，発作を起こす．この場面は集団ヒステリーの様相をよく表わしており，次のように描写されている．

…Here and there, girls, women, uttering strange cries, and apparently suffering from the same kind of convulsive fits as that which had attacked Prudence, were centres of a group of agitated friends, who muttered much and savagely of witchcraft, and the list which had been taken down only the night before from Hota's own lips.… (p. 187)

一人の少女の発言が女たちの集団ヒステリーを誘発し，集団パニックを引き起こしたのだ．その間ロイスは，奇妙な荒っぽい男たちにしっかり体を掴まれて，じっと静かに立っている．ロイスに嫉妬心を抱くフェイスはロイスを守ろうとはせず，マナセだけが「もし運命が予定されていてロイスに自由意志がないならば，どうして彼女は有罪でありえようか」と主張する．マナセの主旨は，ロイスが魔女ではないが故に無実だというのではなく，魔女になったことにおいて選択の自由がなかった故に彼女は無実だ，ということである．しかし彼の理論は，彼が狂気であり，魔術をかけられているとグレイスが説明するように，不合理なものとして退けられる．

少女たちの魔女発言に現われるせん妄状態の真の原因は，多くの人々の注意をひきたい，という自己顕示欲の欲望から生じたものと思われる．個人的悪意としての動機もあったであろう．その背景には厳格で禁欲的な宗教的社会があったことは言うまでもない．共同体社会の妄想は，セイラムにおいて最も無垢で健全な，愛すべき人柄のロイスを魔女として断頭台へ送ったのである．ロイスは妄想的予言が実行に移される対象としてマナセの犠牲者であり，また女たちのヒステリーを組織化する聖職者をも含めた社会の犠牲者でもある．

体をひもで縛られ，自由を失われたロイスは，周囲が石壁の暗い独房の中におり，両すねについた鉄鎖の食い込む痛さによって現実意識をとり戻す．魔女であることを告白し，助命を願うようしきりに促される時，彼女は虚偽の告白をすることをきっぱり拒絶する．

"Sirs, I must choose death with a quiet conscience, rather than life to be gained by a

lie. I am not a witch. I know not hardly what you mean, when you say I am. I have done many, many things very wrong in my life ; but I think God will forgive me them for my Saviour's sake." (p. 199)

セイラムにおいて宗教は狂気を醸成したのみならず，煽動して殺人を行わせたのであった．性的欲望と狂信の結びついたマナセの幻視は，共同体社会において作動する妄想の特別な症状であろう．魔女として断頭台に消えていくことで，ハナの呪い，及びマナセの幻視は実現する．それは作者によって課せられた宿命でもあった．

この物語のエピローグでは，魔女騒動の21年後に魔女裁判で陪審員として活動し，また彼らの恐ろしい妄想を認め，悔いる人々によって作られた宣言文が挿入されている．それには裁判に参加したシーウォール判事による裁判の撤回が記録されている．1692年秋，ロイスの残酷な死を知らず，彼女をウォリックシャーへ連れ戻すために海を渡ってきた恋人ヒュー・ルーシーにとって，その遅きに失した試みはささやかな慰めとなり，シーウォール判事の催す毎年行われる懺悔の日に，彼自身も祈りを捧げることを誓う．

かつてロイスの伯父は宗教上の迫害を逃れ，自由を見い出すためにアメリカへ渡ったことを作者は冒頭で述べている．ロイスがアメリカへ渡ったのも，或る意味では自由に生きれる機会を作者が彼女に与えたと考えられる．英国に留まっていたらルーシー夫人となるであろう運命を，ロイスは逃れることができるのだ．しかしアメリカにおいてもマナセと結婚するか，又は魔女として絞首刑にされる，という極めて苛酷な選択を迫られる．ギャスケルの大部分のヒロインは前者の道をとる．しかし追いつめられたロイスは服従せず，マナセを拒絶して，むしろ魔女として処刑されることを選んだ．彼女の肉体を殺すよりも，内なる自我を殺すことを拒絶したのである．従ってアメリカへ来ることによってロイスは完全に自由ではなかったが，彼女の運命を自分で選ぶ自由を行使した．その意味でこの作品は「より大胆な物語」[10]であり，特異なものと言うことができる．アメリカという異郷の地に物語の世界を設定することにより，作者は自由にものを言うことができた．現実世界では実現させることが不可能な，隠された作者自身の内奥の自我を，共同体の組織にのみ込まれず，正気と理性を失うことなく敢然と個を貫いたロイスの生き方に重ね合せたとも考えられるであろう．

**註**

Text : Elizabeth Gaskell, *Lois the Witch*, The Works of Mrs. Gaskell Vol. 7 (New York : Arms Press, 1972)

1) Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London : Macmillan, 1980) 192.
2) Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester* (Charlottesville and London : University Press of Virginia, 1992) 111.
3) Bonaparte, 110.
4) Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell, A Habit of Stories* (London-Boston : Faber and Faber, 1993), 192.
5) Ibid., 475.
6) Ibid., 476.
7) マリオン・L・スターキー，　市場泰男訳『少女たちの魔女狩り』(東京：平凡社，1994) 28－29.
8) cf. スターキー，第2章
9) スターキー，29.
10) Bonaparte, 113.